

25 宗教改革・宗教思想史

24-8 ※宗教精神史

の家に引き取られ、偶々空ラスケスガ  
 エアン、ガイラスケス (Don Juan Velazquez)  
 生れ、兄弟の多かつた南屏からトシ、ジ  
 彼は一四九三年にスペインの貴族の子として  
 を中心にして彼の傳記を述べることにする。  
 から、<sup>詩的興味には乏しいが</sup>最も信頼す可きものであらう。此の書  
 にイカチラスの述べるまゝを付へたと云はれ  
 の記述は一言も自己の見解を附け加へず  
 記したものの他に三 <sup>あるが</sup> ~~カ~~ <sup>ガ</sup> ~~ン~~ <sup>ガ</sup> ~~レ~~ <sup>ツ</sup>  
 ゴンザレス (Gonzalez) 教師の口述に基いて

カルギンに見られ強い個人意識、明ら  
 かに物を見る態度、何物をも恐れず進む強い  
 実行力等は及宗教改革時代のカトリック教會  
 に於ても見ることが出る。反宗教改革はイ  
 ガチウス、ロヨラ (Ignatius von Loyola) に  
 よつて明確な形を採つて表れ、彼の力強い人  
 格と組織力を通して全歐洲に對して大きな影  
 響を及ぼした。彼の傳記に關しては、弟子の



も夢見ると。と二三か當時口ヨウの域には此の種  
 の書物に乏しかつたので、彼は己む<sup>無</sup>くイ  
 エスや使徒達の傳記をも讀み、フランシスや  
 トミニクスの行為を思ひ浮べ、自分も彼等と  
 同じ行為をする状態を考へた。もとより彼は  
 宗教心から斯かる決心を<sup>想像し</sup>た。その<sup>は</sup>な  
 く、活動慾を満足せしめる爲にニとさら<sup>困難</sup>  
 る仕事を思ひ浮べ、トミニクスやフランシス  
 かしたことをならば自分にも出来ぬことはな  
 い。と考へるに過ぎない。とやかくしてぬる申に

出張つてゐて、極めて見つともない状態であ  
 る。華かな騎士生活を理想とせるイカサナウ  
 スは之に我慢がならず、近親や醫師の反對を  
 押し切つて遂に才三回目の手術を強行した。  
 そのやうなことで<sup>後</sup>病床についてゐるが、  
 徒然と唸める爲に騎士の戀物語集を讀み耽り、  
 如何にして高貴な婦人に近づくべきか、又如  
 何にして婦人と語るべきか<sup>事</sup>と空想を廻らし、  
 或る時にはそれか<sup>事</sup>出で、伯爵夫人や公爵夫  
 人よりもつと高貴なる夫人と<sup>事</sup>近付きを



る中に、或る日<sup>フ</sup>ト<sup>ト</sup>の中は彼を動かしてゐる  
 靈の差、即ち一は悪魔により、一は神によつて  
 動かしてゐると云ふ<sup>二</sup>ことと云ふ<sup>一</sup>ことを認識するに到つ<sup>二</sup>て<sup>一</sup>  
 彼の説明はキリスト教の傳統に對するもので  
 あつて吾々には餘り興味がないか、<sup>聖徒の生活の想像</sup> 世俗的快樂の空想  
 虚な感情を残して對して、<sup>他</sup>が晴朗なる  
 此びを責してと云ふ事實は注目し價する  
 此の傳統の力によるものであるか、又は物語  
 の興味に基くものであるか、乃至はイカチか  
 らその禁慾を此に傾向に惹かすものがあるか

一橋消費組合特製

彼は不思議な感<sup>二</sup>に<sup>一</sup>気がついた。その中は俗  
 的な豪華に思ひ耽つてゐる<sup>時</sup>には、その時は  
 非常に面白いか、思ひ草癡小<sup>二</sup>その想ひから  
 離れると、後には空虚の索漠とした感情が残  
 る。之に對して自分か満足<sup>二</sup>に<sup>一</sup>居るに  
 巡禮し、難行苦行してゐる状態を承へる時に  
 は、單にかゝることを承へてゐる間に満足を  
 感ずるのみならず、かゝる空想が過ぎ去つた  
 後にも何とも云はぬ如く慰安と晴朗な気分が續  
 くと言ふこととある。妙なることと云ふ承へて  
 ぬ

と云ふことは明瞭ではないが、とにかく彼が  
 之に氣附きこり、神カミの導きと解したと云ふことは、  
 彼の生涯の上に決定的な影響を及ぼしたのみ  
 ならず、吾々が彼の人格を描き上げる上にも  
 大きな手筈を與へる。此の事件が動機となつ  
 て、彼は真面目に神カミの生活を回想して、自己の  
 多きことに氣附きこき、いふ深人志を起つると共に同時に活動欲カミを  
 徒の模倣をしようと志す。斯くて彼は自己  
 を神に捧げ、神への奉仕に關係するもの、乃  
 ちはその妨げをもつものは一切之を退け、よう其

決心したのである。如何にも武人らしい鮮や  
 かな轉換振りであり、騎士が僧生活に入る典  
 型的なものである。  
 一五二二年世二才の時彼は病魔之故郷を  
 去り、途中で巡禮の仕度をしてバルセロナ  
 (Barcelona) からイタリヤに渡り、その中から聖  
 都に赴かむとしたが、暫時ハストが流行して  
 ぬた為に之を遅おそけ、暫時マニラ(Manila)に  
 滞在した。此所に於て彼は乞食カミ、髪も爪  
 も剃らた、酒肉を断つて苦行をしたが、其間

に「自分は二十から七十も二人な生活を續  
 けようとするのだから」と云ふ身へか浮ん  
 彼を苦しめ。懺悔をしても不守であり、キ  
 リストの教清さへも疑ふこともあつたが、精  
 進の結果之を悪魔の声として斥けることが出  
 来た。此の時滞在中も彼は多くの幻を見た。  
 或る時は三位一体の像を、或る時は神の世  
 創造を見、或る時はキリストの人間性を見  
 此の場合、彼の見た幻は漠然とするものであつ  
 た。三位一体は三本のオウガンの鍵の如く



神の在界創造は「白」ものから光線が出る  
 やうに、又キリストの人間性は白い物体の如  
 くに見えたと云ふ。かゝる経験の後、「精神の  
 訓練」(Exercise spiritualis) に多大の影響  
 を及ぼした。このことは云ふ迄もなほ、之に  
 ついては後に述べる。特に或日のこと、彼は  
 教会に行くと、途で何を目と瞬間に彼の心  
 開かぬ。凡そ物か全く新しい見地から見  
 らるやうになつた。此の時彼は何を理解した  
 かを述べるとは不可能であるかと口かく





神學を知らざる故を以て信仰問題に口を出す  
 ことを禁せられ。之にて彼は仕事を失ひ、  
 隣人に對して奉仕する道を見出すべくサラマ  
 ンカ (Salamanca) に赴き、此所キリヤも説  
 教を禁せられ、遂にパリに移つた。此所キリヤに於  
 て彼は人文主義の學問並に神學を勉學した。  
 彼のパリに於ける勉學は後にエッセイ、ト教  
 育 (Paedagogik Jean) の中キリヤに發展せし  
 められ、同教團の勢力擴張にとつて重大な意  
 義を有するに到つたのである。彼はパリに於



こも説教を行ひ訓練を施したか、學生を惑は  
 すものとして不評判であつた。一五三五年に  
 彼は胃病治療の爲にスペインに帰り、更に一  
 五三六年にはイタリヤに移り、ローマ法皇の  
 許可を受け、在ルサレムに行かうとしたか、  
 トルコとの戦争が船が出なかつた。其間彼は  
 對して自己の所信に従つて傳道に努めたか、  
 翌年遂に在ルサレム行きを断念してローマ  
 に引き返すことにした。此の旅行の間にも彼  
 は度々靈感を受けながら、就中口に入る教

云ふ「吾汝が吾等に仕へむことを欲せし」と  
 此の奇跡を受け、彼は神に謝し、教団をイエ  
 ス教団 (Grellschaft Jesus) と名附けた。イ  
 エス教団 (Compania de Jesus) と云ふ名は、  
 当時の言葉では「イエスの軍勢」と云つた程  
 度の意味を有し、イエスの禱印の下に集つた  
 軍勢に自己の教団をなせらへたものであり、  
 此の印象は極めて強烈であつた。此の  
 名前を附しなすは、神の意思に逆ら  
 ぬことになつた。彼は後に「回」

哩の地裏で神が彼をキリストの下に召し寄せ  
 るのを明白に見た。其の時、神は「次」の如く云  
 つておぬるやうに思へた。吾は「口」にて汝  
 等に恵を垂れむ。彼は其の意味を解し兼ねた  
 次の如く答へる。「稽」等に何事の起るやは知  
 り申さず、恐らくは「口」にて傑刑にせらむ。  
 其の時彼にはキリストが肩に十字架を背負ひ、  
 その側に天の父が居た。次の如く云ふやうに  
 見えた。「吾汝が此の者共を世の僕とし、受  
 けむことを望む。さうするとキリストは「彼」

確信せざるものは一行も存せぬと云ふことに  
 氷の中にはイカチウスカが自ら體驗し、  
 か多數に存する。此の書は、  
 リ、自己の精神を根本的に轉換せしめた人々  
 の要するところを忠実に実行することによ  
 り、多くの人に大なる影響を興へ、此の書物  
 物は詩的感興には極めて全し、小冊子である  
 精神の訓練を見るに如くはよい。此の書  
 イカチウスカの根本信仰を知り玉か為には

想して述べらる。斯の如き自己の使命に對  
 する強い拍響の下に彼は、  
 強化と普及に持たせんとする。此の書は、  
 後、  
 生命を救済の





合には、  
 ことである。人間は此の在る事物を神に奉仕  
 する限り、  
 業の縛りに心を奪はれ、  
 女にかあつてはなまぬ。  
 氣よりも、富を、  
 よりも、長命を短命よりも、  
 うにならぬ。此所に「無関心」の  
 徳か何よりも強く要せらる。精神の訓練  
 は斯の如き無関心の状態に人を導かむが為  
 る。イガナ、  
 は単に消極的に「無関心」  
 理想とするものではなく、  
 に融通無碍の精神を以て、  
 とを目的とするものである。訓練は斯の  
 如き状態に人を導く為の手段に過ぎず、目的  
 は飽足行為に存する。  
 第一週は罪に對する省察に費さる。

一極消費組合特製

人間は被造物に  
 心を奪はれ、  
 即ち

合には、  
 ことである。人間は此の在る事物を神に奉仕  
 する限り、  
 業の縛りに心を奪はれ、  
 女にかあつてはなまぬ。  
 氣よりも、富を、  
 よりも、長命を短命よりも、  
 うにならぬ。此所に「無関心」の  
 徳か何よりも強く要せらる。精神の訓練  
 は斯の如き無関心の状態に人を導かむが為  
 る。イガナ、  
 は単に消極的に「無関心」  
 理想とするものではなく、  
 に融通無碍の精神を以て、  
 とを目的とするものである。訓練は斯の  
 如き状態に人を導く為の手段に過ぎず、目的  
 は飽足行為に存する。  
 第一週は罪に對する省察に費さる。



かもイカチカうスカ口ヨウの城に於て為せ  
 如く。この決心は一時の興感に於て為さ  
 ぬ為に自己が如何なる地位に於て生活を  
 して行くかを明確に思ひ浮か、且つ其の  
 内的状態が神に仕へる生活を為す可く充た  
 熟しこぬるか如何かを省察する。自己の内的  
 状態の省察は謙遜の三段階によつて最もよく  
 練達せらる。第一の謙遜は、死に思はう  
 の中に陥らむよりは總てのものを堪え思はう  
 と云ふところに存し、第二の段階は、仮令此

一橋前費組合特製

リストの生涯に目を向ける。省察は三位一体  
 の神性か人間を救はむとする決心から始めら  
 ぬ。蛆虫の如く横はる人間を眼下に見下し  
 てぬる三位一体の古界より天使かガリエルか  
 マリヤの下に遣はれんとするから、キリスト  
 の出生、聖家族の逃避行、両親に仕へるイエ  
 ス、寺院に於けるイエス、サタンの誘惑等凡  
 て繪とすつて浮び上らぬならぬ。此の最  
 後の場面に於て人は自らイエスカサタニか、乃至  
 は神か世俗かの決心をなさねばならぬ。恰

むか為に置かれと見る可きであらう。  
 倍之等の叙述を通じて吾々が先づ感ずるこ  
 とは、イガナクリスが想像作用を重視したと  
 云ふ事である。或意味に於ては彼の訓練は投  
 工的であり、妄想を玩んでぬるやうにも見え  
 るが、想像力を働かせ、その中によつて意思を  
 訓練すると云ふことには深い根拠があるやう  
 に思はれる。反省的觀念が絶えず浮動の状態  
 に有るに對して、想像力によつて画かれた画  
 像は客観的なものと見做し、固定性を有してゐる。

一橋大学組合特製

か子雁好とも、その上は凡この他のこと  
 を諦め、<sup>お</sup>こ<sup>お</sup>に<sup>お</sup>ある。才三の段階は更に進  
 んで、彼令神の栄光の爲には無関係であらう  
 とも、唯キリストに近づかむか爲に、貧と屈辱  
 を受けようと迄決心するに到る。此所迄到ら  
 ば人は世俗的欲望の爲に神への奉仕をおろそ  
 かにするやうなことはなく、此の境に  
 訓練の最高潮であつて、才三・四週は夫  
 キリストの受難、復活及び昇天に捧げられ  
 るが、之等は才二週に爲せる決心に習熟せ

を犯す





巻

と	云	い	此	向	疑	の	次	め	為
子	小	こ	の	け	問	こ	の	ら	に
を	判	お	言	ね	加	あ	如	に	移
行	断	ろ	葉	ば	生	子	く	移	す
は	に	も	乃	は	い	か	述	す	こ
ね	到	い	至	た	二	乃	べ	こ	と
ば	達	く	は	ら	場	至	こ	と	よ
ら	し	は	此	ぬ。	合	は	ぬ	こ	ろ
ぬ。	こ	は	の	そ	に	は	、	か	る
係	何	少	行	し	は	人	此	る	危
一	等	く	為	も	は	は	の	る	険
感	踏	と	は	し	人	は	行	る	か
情	す	も	神	神	は	は	為	る	ら
一	る	そ	の	の	神	は	果	る	免
	こ	中	榮	神	の	あ	る	免	れ
	二	に	譽	の	方	る	か	し	
		扱	を	に	に	の	の		
		か	目	於	こ	こ	こ		
		ぬ	的	こ					
		と	と						

る姿を取つて展開されてくるのを見るであら  
 う。反宗教改革時代の教会に於てバルトは藝  
 術を尊重せられたことも故あることである  
 イグナチウスは想像力に富んだ人ではあつ  
 たが、アッシジの聖フランシスに比較すれば、  
 その豊かさには、又それに伴ふ感情の温か  
 さに於て到底及ばない。イグナチウスは情緒  
 は枯乏

行為の間には密接な聯繫が存し、其間に些も  
 停滞があつてはならない。像を画くことに依  
 つて喚び起された感情は直ちに行為となつて  
 外に働き出で、逆に創造的行為は感情を高め、  
 また高められた感情は生き生きとし活動いた  
 像を生み出す。バルトは藝術は斯の如き氣分  
 を良く表してゐると思ふ。ルイバンス、ガレ  
 コの絵画、バルニーの彫刻乃至はバルト  
 コの寺院、別荘、庭園等を見る時、人は其等  
 の中に瞬時も停滞することなき生命を偉大な

冷徹な性質を持つてゐる。山や草花をも友と  
 いへば見るとフランスと、武士的氣風を以て悪  
 魔との戦ひに臨んでいけず、その間には、  
 同じくフランスを尊重しよと云へ、大  
 なる経歴が存すること疑ひを容れな。も  
 とよりフランスと雖も己の活動欲心から  
 僧生活に入つたのであるが、彼は全作の調和  
 を見てゐる。そのありか、<sup>自派から</sup> <sup>とあるは</sup> 観照的と  
 對立する力か無きか、<sup>勢</sup> 活動力が萎縮する事  
 傾向の中に含んでゐる。之に對していかな

それとも彼の要領は何か傾向があるか

一橋消費組合特製

しく、悟性と意思に於て勝つてゐる。白  
 もの、<sup>一</sup> 光るもの、<sup>一</sup> 等の用語も見ても、又三  
 位一作を三本の才に於ける鍵の如く画かき二  
 とを顧みても此のことは領けるところ。フ  
 ンシスもイカチウも共にする。フ  
 ンシスもイカチウも共にする。フ  
 知を見、イカチウを眺め、<sup>前者は像の間は調</sup>  
 和を超越地的のものとする。後者は  
 天の光るや、まは悪魔の脅せる妄想なり  
 やは悟性の判断に俟たねばならぬ。継

彼の見たイメージ

彼の見たイメージ



さい。彼の罪意識は中程烈しくはなかつた  
 と云ひ得ると思ふ。以上の如くイカナク  
 の「訓練」は想像力を働かせることによつ  
 て意思を訓練し、意思をして地上的なもの  
 には「無關心」<sup>にす</sup>にすることによつて、自  
 由なる決断を為さしめるところにその本質を  
 有するものがあるが、斯かる傾向を助成せし  
 むる為の<sup>更に</sup>有力なる手段として彼は服従を尊ぶ  
 ことゝする。強度の自発的意思と絶対的服従と  
 の<sup>一見</sup>矛盾する二概念はイカナク天才的組

個人単位、個別的に  
 行はれるべき自由  
 精神、人々の間に  
 生ずるべき影響を  
 認むべきものである

4ウスに於ては予ニ夕ジ一は意思の方向を  
 定めると云ふ役割を有するに止つてぬるもの  
 であり、生活の現実には活動と闘争の中にある  
 彼にとつては意思の決断が凡そを決定するも  
 のであつて、人間が神に劣ることも、乃至  
 は地獄に陥つたことも單へに意思による。此  
 の真如宗教改革の人の倫理意識と異なる  
 のである。後者にこつては思ひを考へ、思ひを  
 感情等は思の源<sup>に其て</sup>と考へられ、彼にとつて  
 は其等のもものは意思に影響せぬ限りは思ひは

は軍隊的に訓練せらるることにより自己自  
 らの主となる。絶対服従は絶対自由に列する  
 道である。僧團は大將 (General) 特校、  
 集非等から成り、各團員は法皇に直属の關係  
 にありながら、いかに上官に對しても絶対  
 服従を守らねばならぬ。この絶対服従の團  
 係に從はぬもの、乃至は自己および隣人の  
 救済と完成に對する教團の目標に及する如き者  
 は直ちに追放せられ、其後の處罰は一切之を  
 見こやうない。或る時の如きは團員の半分以

織力により、ソエスイツト教團の団体組織を  
 通じて極めて巧みに綜合せられらるる  
 イガナケラハは前述の如く軍人より宗内に  
 入つた人であり、その個人的<sup>性</sup>體験に於て軍人  
 らしい徹底性を持つてゐる。団体の方面に  
 於ても彼は軍隊の組織を僧團に適用し、軍隊  
 に見らるゝ絶対服従と整然たる組織とによつ  
 て団員の訓練にあつてゐる。團員の意思

ストの言を聞くが如くでなければならず、單  
 に上官の命令あつて起る後にその意思に従ふ  
 かけでは不充分であつて、上官の一才の動  
 作、目くはせ等に於ても直ちにその意のある  
 所を察知して之を実行に移さねばならぬ。之  
 に對して上官は、如何なる場合に於ても常に  
 適確なる判断を下し得る為に思慮力を訓練せ  
 ねばならぬが、此の場合の判断とて自己の  
 意思に従つて判断はするのではなく、國体の秩  
 序に従つて、否キリストの精神に従つて行は

上を一時に破内して二とさへあつた。もとよ  
 リイカ十午う人は常に苛酷を以て臨んでゐて  
 はなく、脱圍をし度いと申し出る者に對して  
 は、その人物に應じて、或る時は之を快く許  
 し、或る時は残留を薦め、また一旦脱圍して  
 者でも後に思ひ返して再び入り度いと思つた  
 者には之を收容して二とさへもあるが、時に  
 かく教團の秩序を乱るが如き行為は一切之を  
 許さざらつた。團員は全く自己の意思と判断  
 とを没却して、上官の命令を聞くこと恰もキリ

に対する服従はさくして、キリストに對する  
 服従はさくして、  
 人格を、誤謬と不幸の状態にある人間の  
 として、いはなく、汝等が人間の内に於て  
 に従ふところのものとして、キリストとして、  
 最高の叡智として、測り難き好意として、  
 た汝等のよく知る如く、決して自らを欺か  
 ずして汝等を欺かざるとも欲せざるところの無  
 限の愛として見做さねばならぬ。とイハサ  
 ウスは云つてゐる。上官の命ならんは、海の上

水ぬはらうまい。斯くて自己自身の<sup>に</sup>判断の  
 棄といふことが極めて大きな徳として賞揚さ  
 れる。凡そ宗教的体験が高調さゆる場合には、  
 自己自身を全く無にして神の前に捧げらる  
 のが常であり、<sup>特に</sup>神に於て<sup>神に</sup>於て  
 (Selavenheit)の徳が重んぜられぬること  
 は、エウハルトの叙述に於て論じて置いた如  
 くであるが、イハサウスに於て特に著しい  
 ことは、自己放棄が上官への絶対服従を通じ  
 て訓練さゆる点にある。上官への服従は人間

41行



以て行動するのみならず、  
 にもその精神を傳へ、  
 イツトの僧團は、セイトヤ  
 一の如くに同志の者のみが  
 の生活と營業とするもの  
 活動力と鞏固なる組織力  
 スパイニン、フランス、  
 の政洲諸國はもとより、  
 赴き、日本にも、遠く  
 カウアイ (Frang Karrier)

一橋清登組合特製

人を常に晴朗な気分と溢るし  
 命の働きを體驗するもの  
 官に服従するものは、自己  
 等は後者の場合であり、真  
 前者は後者の場合であり、  
 即ち、愛、謙遜、單純、  
 悪徳は自己主張と我意に  
 申す徳は自己放棄と服従  
 小はなるまい。イグナチウ  
 を老安いで行くニとも厭は  
 ればなるまい。イグナチウ  
 申す徳は自己放棄と服従か  
 悪徳は自己主張と我意に基  
 即ち、愛、謙遜、單純、明  
 前者は後者の場合であり、  
 等は後者の場合であり、真  
 官に服従するものは、自己  
 命の働きを體驗するもの  
 人を常に晴朗な気分と溢るし





のものを感ずるのである。或る見方に立てば  
 フランス人カルヴィンとスイス人イカサチ  
 ウスとは全く異つてゐるとも云ひ得よう。就  
 中英國に渡つたカルヴィンと南アに於け  
 る反宗教改革とを對立して見る時、前者が現  
 象の世界を全く罪深きものと感じ、自己の工  
 ネルヤ一を政治乃至は経済の方面に集中せし  
 めて對して、後者は禁欲的であり乍らも猶且つ  
 美的觀照的な要素を持つてゐることには否定出  
 来ない。しかし乍ら英國に渡つたカルヴィニ

ない。しかし乍ら目標を明白に描き出し、そ  
 れに向つて個人もしくは団体如何なる障害  
 をも恐れず突進して行く趣には或る共通のも  
 のが存~~する~~<sup>する</sup>といふ得ぬであらうか。カルヴィ  
 ンとイカサチウスの団体觀に於て、本質的に  
 異なるものは長足の貴族制と法皇の独裁制とで  
 あらう。此の差異は信仰の當事者にとつては  
 絶対に融和し難きものであらうか、吾民性  
 を見て取らうといふ吾々の立場から見れば、  
 両者は相對立し乍らも猶その根柢に或る共通

る及宗教改革の運動、乃至は及宗教改革時代の精神の表現と見らる可き、バロック藝術がフランスに於て極めたる隆盛のみつて、これを見ても領けらると思ふ。

ルネッサンス <sup>進歩的</sup> のカトリック <sup>教会</sup> 的調和ある階層的構造に於て見らるるに對して、及宗教改革時代に於けるカトリック教会は法皇と先頭に於てこの信者の不斷の活動である。此れと同様に、ルネッサンスの藝術は物の姿の中に永遠に安らぐ小イテリを見つるに對して、

一橋附設組合特製

カルヴァンの中には禁欲的であり乍ら、やはり明瞭な光の中に事物を見らるといふフランス特有の傾向と有らぬ。之に對してイグナチウスは明らかにスペインの神祕主義の系統を引き、またその多血的にして冒險的なる裏に於てもスペイン人の典型的なるものあり。此の事實を認めつても吾々はカルヴァンとの類似性を見ることか出来ると思ふ。此の二とはイグナチウスの刺戟によるところ大なる

パロウク藝術は、物の姿の中に流動して己の  
 古い生命を注か込んでゐる。姿の中に動きを  
 見、<sup>動き</sup>動きに於て姿を見るといふところにパロ  
 ツクの本質がある。及宗教改革の運動は一面  
 に於て中世への復歸の如く見られるかも知れぬ  
 が、その実は文化全面に亘つて、<sup>イタリヤの</sup>ルネッサン  
 スの文化の中に北方の動的な要素を取り入れ  
 られたものと見らるべきである。藝術に於ける  
 ミケール・アンジェは、自然科学に於けるガリ  
 レイ等は、その移り果にある人々と云ひ得る。

斯の如き及宗教改革のカトリック精神がフ  
 ンスに於て勢力を持ち、テカート・マイン  
 ランシュ (Machbranche) 等の哲学者を生んで  
 と吾々は見るものであるが、之に因しては又  
 別の機会に述べることにして置く。